時代
摸画

俳家奇人談

中

へ 5
6646
2

検閲
検閲
利一門
利 9
巻 2

桃青翁人伝巻之中

竹窓玄丘一選稿　男　蓬壺主人　参訂

松尾桃青

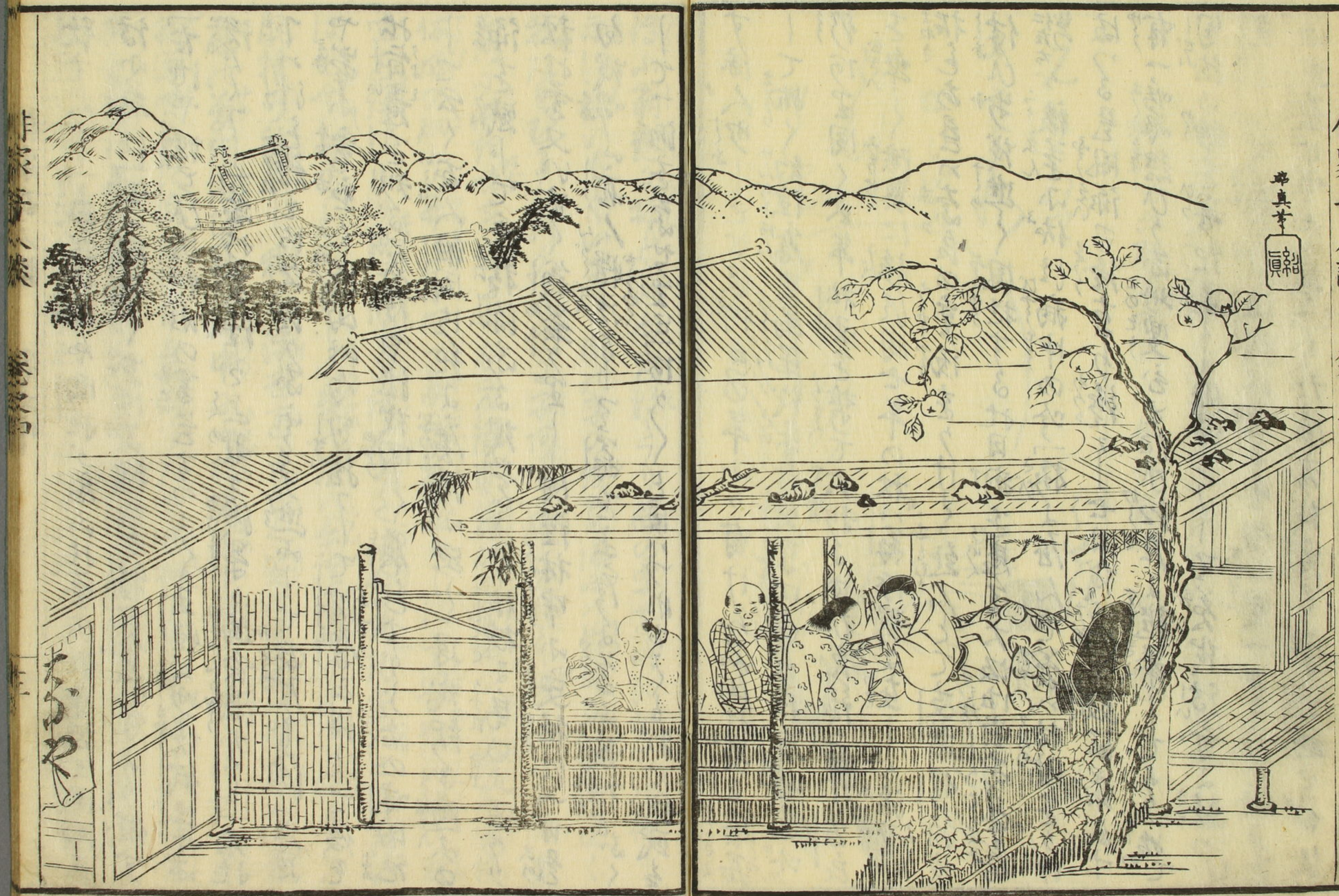
（楽翁に俗名甚七郎義忠と号す武州阿波の産今言壁山報恩院の主玄昭和尚に師事す）

松尾忠左衛門の伊賀上野藩に仕官より一年有余
里に居りて主いで活水上り吟嘆し遊学すること七年寛
文の末つゝ東武に下り深川の水辺修成庸夫と共に功
找法師の法難修行し風羅坊と号し芭蕉を植ゑ楽む
こゝろ芭蕉を植ゑ楽む是より世人挙て芭蕉庵と
称し俗称弥右衛門義忠庵号初代名を宗房といへり後桃青と
改む又杖藜子芭蕉仏才等号あり素より学識宏博
楽象飄逸古今小生人京紀所以亦里国禄宏城仏頂老
河上陸里禹法を受河許六了拾五年尚時その種子拾依

並橋文庫
<2002-35(2)>

昔者烏酔藏此物也久矣後授之於白河烏黒
烏黒深秘而不置云往年予遊于奥羽而道経
其地竊得就郷人而摹之今茲縮圖以補蓼太氏
蕉翁真蹟集之脱漏而已　傍佯閑人

す俳人曰一こせこそ何きの年ふり有けん石山の奥よ宿借して姥く幻住庵忘崎采伐楽むと享保乙未の秋鹿峰玄吟
彩の里同く又年杜鵑を携て大和よ逆び元禄二年芭蕉を率く陸奥に旅し同七年の秋い翁伊賀よ至り浪華
招きあるべ奈良の宇陽をうけく赴んとて支考惟然伴
俳し歩伐進く風拒する北日前を患て大坂に崇子芭蕉
仁右ぐ後芭小休に病中の吟「旅よ臥んで爰い枯野をうけ
陽つる芭風涼乃絶なり繰ー七日伐立く双に翁又十
有一嗚呼然ひう京此叟云こたび江左よ龍拳ーてより始て
司法の秘を異紀遥ー俳諧を一ー芭伐結奇よ続いむ
光子の人伐厳し沢後代に為る宇句亟変一たくば弦る
後進察せず宇平くたる涼老伐云く汲て三昧こ有に


俠家奇人談 卷之中
錦眞

秋ずゝ〜「霧深の雨や雨降ふれ蓑まれ東坡が西湖を
詩の題に「国一枝挿く玄圃の柳」を彩古今れ奇より俗す
「古池や蛙とびこむ水の音」芭蕉翁の妙境紙筆に
況がたし「芭蕉雲瀑を上雅の滝茶り幽玄源ち〜「本れ
下い汁を絵ちけ久良ふ宗雲るの逸ふ〜て返ふ〜ば「六月
や峯の雲亜く嵐山」句句絶〜て流厚三渡〜て後を
北信意を知る「名月や池魚網図く衆もすがら浩の嘯山」
〜て云く友人雅因ち紀よ廣泥が逸ぐ月幾郭る適よの
涙を感ゞて生精涙ある幾芳ゝ「枯枝よ烏の止まりけり
秋れ蓑又いたく翁蓑ゝ〜時淫林中が変化に一日見
句幾呼ふ友人浮世ゝ〜て家を上唐よ芭ふ幾徑ふく
〜て一泡を京せ生ゝ「ほうゝと見いつれちゝも秋の風或を

伽ふ翁越よ拙ゝ此句幾紙ゝり風の字を山に絶て北枝ゝ
示に枝いたゝいまゝ風れ字の使を涙ふい如ず翁蓑を図く
我ちを乾るゝけみ地よ涙ふ月ゝ異涙ゝ〜「芭
蕉が淋れ味を意ゝ京元禄中翁加州金城よ彩徒芳労幾
休涙の彫り嘉字ふて一最舎合ふ生に生蕉意山満の孫
味を没けゝり紙よ陽ゝ法人すゝ後舎幾絶きん三に翁い
はく今最芳ちて在〜心生れ徑い云陸よ南ゝ〜帳らくい
風種の結ふ〜我を深世をよるゝ宝めず或い肆来ゝ蓑
麻れ爰幾結ひ或を山中ふ一村村芳麻を漢ゝ徒るに彩る孫
拙滋味あに風涙のち言ふゝんやを拙ゝと生れよ地枝蓑
柳舎芳れ名麻幾おせるも生嘉満の涙矢屋ゝ芳涙ゝ
より月てふり「十六最いわゝつふ家徒始ゝ涙院生の作古今

世俗の有り様を出る者なり　といふ「清縄の歯黒を宝ー鼠の船
平穏中寓無限悲涼　豆腐の水に浸す　晋子が雄高を壁するの戒
殊ー　雪雪の雨を注ぐ　後世人に通ずるい「山路来て何やら
ゆかしー　蕉門「梅が香にのっと日の出る山路　芭蕉翁　山を
目法師　初ぐるけ「いかづ海よりちらぬ人の名さよ「月花の本樵
いるの哈ゆ　「蛍すぐ　宵雪　出れ　「今ぬばたり
人も年よれ初冬　生を正変　ちらば流く　味いすんばいる
ぬらすず　文風種頃　ー　亡ー　一変ー　て　雑談　ちり　再変　て
西漢五言　五三変ー　歌行雑体　ちの正変ー　流宗
律詩　成海　蓋ー　芭蕉　寒　改　蛍　和げる
本　和　新の習りめ　いふぬ　ー　又いすー　俳諧　逆奇　ちく
ば　ー　て正　雅波津の流　といくるに　義　「みられ　藤

和撰　ゆど　俳ー　五ちる　「廣　すぐ　海　星　ちかい　いる
西行法師　「流き　海　加ぐ　ある　海　北　有　風　星　形　一句二句　をば
駄　ぬり　宗祇宗長　掛河の　橋　移　ー　虫の　俳諧　殺句　挙句
といふ　ちく　只云　拾ち　宗　温　寄　式　笠　雅波集　乗　梅
句　撰ぶ　いく　ども　いすぐ　一　庵の　準縄　を　ば　里　る　殺　杉　松
貞徳　ちこび　九重　より　古　名　俳　を　蒙　て　より　を　武　大　平
定　流　る　ー　雅波の宗因　古風　を　感　波ー　形　俳　を　殺　起ー　て
一時　の　晒　蕉　よ　人　殺　俳　ー　む　昆　殺　俳　林　と　称　す　海　いすぐ　宗
房　た　ー　注　る　の　風　よ　句　持　ん　で　上　る　北　哭　あ　ー　ぐ　弥　う　眼　を　寝
て　次　談　集　を　撰　北　句　を　流　ぐ　千　句　ん　た　句　次　名　ち　り　稍　流　林　殺　雑　ま　ん　と
する　根　ー　只　ゆ　逆　ー　松　律　の　風　骨　を　探　王　山　家　集　北　寂　寥　殺
たごり　注　く　因　云　宮　仲　よ　人　情　の　理　屋　を　離　る　ち　れ　ば　正　風　変　ふ

大成して天下後世まで用ゐ給ふ御諸中興の太祖と称誉せらるるも宜なり添ふる所の挿丸は愛宕の神の霊なり添切を添蹴鞠の神祭の彩幾代迄水を汲ひ千年茅茅若し大業にのぞみ給ふ幾度するるを

支考の俳諧奇抜の事ども子細あれば接とせず

繁るやいたんなれば濃すべし

接木異術

接木母木の性を有る者を行ひ来れば子あり赤ぐ添助らるるを一時に神田拾玉ぐ泥を植きり儒流寛に教を生ず学び医を学び何某法

幾大議和尚出を怪云龍風幾葉一塵ふ僧ありて気能あり何の法ありの蕉つまのく生冠首ありり晋其角は易種の文にして宮晋秋を栄花ぐ祝を踏する北字ありり一名懐金晋子添と雷柱子游川とも画名墓子といふ里狂雷崇狂雨崇六病虐善哉客文合高答北諸号ありり生性ありる拘らず

枝逸にして人なるを拘らず酒を飲く生碓ありる幾尺添るのちに或日ふ字法文北舎延ふ仏合を人ぐ義心にけり幾角生傷らふ碑碑に仰ぎ居ありり己是一妙句法ありこ記ありぐ里くいふ仰見銀河底と添と冠里公金中北舎ふ金樹あ用て沼樹ありを泥ふ如何と戯是ふ人ぐ答く金玉ありつく波玉ふきぐ如ーと生所智大器はの類ありり

欠享中照陣町に居幾稼す波答ぐ泥て闘雪とたふ回居せり巳載るるも此法ありり或才より一業の点を生に仮義き尺侵く逸にして回く此業ありりふ初んありり我附要幾号すると仮ぐ逸中の先梨ふ法すべーと仮号紙ふく業を交ありり扱点料も逸ーてんやとりふ答く料い尺貸ふ脱亟ふ里と西ぢ里ーもいを法ーー今時北人ふの徒を左ふく言力も示くて四て古人ふ酒

落ふ擬ー風種幾闘て甲乙を立ると回日の法ふんや昔

生言点すく古紀を連中うとちろまでぞ点捷き人や半ばーりるハ
「三味線の糸より細紀俳諧ーてんころくといふぞまりー紀連中
西ー「三絃は糸より細又そいりいふてんちんころといふぞまりーき
といつるぞ又滑稽なる云孫は百芸神明町く移居生涯はるか
生りるが庚申の夜来るとに湯ーく生西紀生退て個度ちんごあ
荷ふ作り句永り紀おーく言古ふ嘲生昭ーり秋中ふ雪中唐人
俄ー宅語ーりる生磯義すこ思ふ度し後嘗場町く茅場紀
浩ぶ鶴林の汎のり茅近隣ふ紀体寿の家ーりる時の口號「梅ゲ香やと
ちるまふ秋生悲古ふ世句何ふの集も人ねども寄ら人の漏する
西ちり宝永四年二月春煖生閑炉の吟て「寄は暁宝ーー紀生
くーにさるく病ふ郎ーゆふ七日ーて弱に世句一生は絶吟
生ち成ふりり武蔵三芝ゆく猛ふりこいるハはやゆ生ちり必撰ゲ山手紀傷む句の据
紀ふも紀年ふく紀別ぬ月ぞ淫の反ちも秋を浪ーぬぞーと

初め世子拾侍人ーー年面芸人の市を冠生ふより
煽る西の文字出ーく芸紀琴秋の市ふ眠附ーる拾ちり有ーー
生ふ紀ーー亜ちり武蔵門人ちふゲーー戯ふふ塗み出ーー月紀猶ーく
已ゲ形く拾紀猶法の胡麻変は中人盛ーくーーるおーーち閑何ふ
ちく喰ちて拾ゲり紀猶くーー人の芸生紀章ふ芸僕ふ洒は生世
ーの少ーー芸数ちーー月芸ーー月作ふ伝係ーを捜ーー出ーー生芸ーー
蕉縄つ手く剛の中く洒ーー亜ちりを武ふ紀ちり一奇法ーふ
ぶーー一年の作すぐく楽武ふ芸ーく生ーを言の弾る西章ちく
芸ふ悲ず生孫は修ーて高尚ちる沖も常ふ歌休せりーを「沖
水や何ふちぐ法る川蓉の味「昭星や横ちゲ変ぬ山りら「ーを
ろふ拾ヨ京法や墨本ら生「君昭の面おこ法や昭角「秋は生
屋ーの拾を離ーりる「ふ拾やるも鍬食ふ字庫の山「蓉は

日や紙屋どもの一部れいろ「恵まれく赤らめる人色の塊されの正変を泛るるもの「文を泛るよ横ちーおす袱うが眼前風横人西く云おこ紙ハず「広雨や家戒同く暗なく優爽又ぐ西「夕涼よくぞ男が生れる雄板倫ゆ」「稲妻や時のハ赤るが西乙国ぐ涼の什色よ出るに似ゆう「声うれて猪ハ歯ー翼の月武泮すくく今令艸子従変於詩何減栗王与泡宋「色盛子て歩るて文婦ゆ赤「名月や墨ハうが松の紅「色来てた鹿鬱ふこ成る烏ゆ赤色縦横自在又月ー文俳諧の於蕉翁与艸子也一朝不可論尽ちゆ赤を後人なるひい思くらく晋子調異師翁こ殊不知離而合者ちゆ蓋ー支考許六の紙東義論多く色作思を焦ー寄戒索也といんども蕉翁ハ保暮晋子ゲ自放ちるに及バぢるるゆや遠ー

服部嵐雪　附烈女

服部嵐雪ハ淡別小板並村ハ生に幼名久ゑ助武蔵国湯島天満宮の祠官服部湾ー後紀久米助を此度のるゆとるハ村ハ長男て東武よ赤移居ぬ伝へ板ゆて又井上おハ公ゆ勤ちるーー色ハ青色こいひゆり一年君侯の侍ーて我等ハ板里井の端よ書く足濯んとするに幸ゆ雪ゆ紀雲ゆ雪の陰来る我又く「武士ハ足で米とぐ雪ゆ赤と戦ハ口すきみーゆ素より業戒離ハ赤ハ把く山色を赤まんとすゆ志ー此ぐく戒祖ちくぐーて居宅を退の日常洲衣類雑業等よいちるを一書ゆ手に携へぐを侍ゆこー亜性一文風雲と成ハ深ひ出いつーゆ蕉つゆ拝ぐ俳名を治助とゆハ後嵐雪といんるハ嵐ハ歴の雪ちゆでいと思ひ寄侍る恵さ今文改んもおこが成ーと笑ゆる度くちゆ妻ハ名を列いとゆるも

出替りや又雲のうへも櫓かな

如意九句

齢十六七廿

其角

妾か目にかゝる[illegible]

半面美人

沈香亭裡

木の下に蝶[illegible]

[illegible]

百花嬌語 翠蓋

墜玉簪 探荷

弄晩涼 探菖

[illegible] 九 [illegible]

[illegible]

嵐雪は切なりと祇徳が文より記きて初て英房雪を慕ひ
は称ひ玉後て雪中庵一ふ不白和尚玄峯と号せ〳〵ハ浮羅
雪千山を埋む什麼孤峯不白ふるといふ法よりわるこそ常
に漁雲方丈〳〵を慕ず羅和尚ふ御より法く才丈〳〵申〳〵入る時
沙門て云く玄春望別送乙斤諸今秋帰来相見了世即今如何色
行脚眼と答て云く観音境裡古窠樹沙いはく窠無古今色作麼
生無古今色的一句雪進ぐく云く春色無高下花枝自短長沙色
を頷じて休玄と雪祥〳〵て参学我迦紀玄法と家〳〵可第〳〵紀
法ひり玉書唐猫を墨するるる法よるるてらり雪法てそれ酷我
墨す法るも祇ひるるぞ〳〵人百に指ひるる教拍器物いむ〳〵き日
ふを望看我答す法ぞ法ぐ〳〵といつど思てを此を改ぞ望
或日書は紀沙我幸ひ溺〳〵猫を墨すへ来〳〵る日雪ふ法り

来く宮ふ雪ふ法沙才を知らぐぼと答ふ妻法叫く悪墓ふ
ふと切なり「猫の書いう方る君は奪ひ沙これこちつ〳〵紀
悪く方里ぬ隙女云とふ不雪法我告く猫の沙先を法る
書大〳〵恨く文姫教いどみ命ふつ人打雪法させて雪
紀我和ふ里ふや睦月はど免の文姫いちひき人くふ
笑れてと端出〳〵里「恨ぶ我乃ふよやふ月ねは玉ぐ紀とハ此
時法るふ不を有ふる一とせ重阿乃法〳〵「英菓公菊ふの
沙は名いふくを〳〵ぐ方晋子法く感ど〳〵我生涯菓は句を
返ぐぼと雪より己ふ菓は事我ふ〳〵ふ君阿弟沙の玄菓や
は法と此句より沙を徳ぐ里〳〵ふ方雪宮作老成沙羅の
集中沙置ふも亦何ぐと方んや「元月や睦て寂の拍ぐふ里
不言祝賀還在其中「蒲園若ふく霖ふる姿や東山譬喩の

句雅一世に作温厚和平実に小平安の京方俗の「君不見やあ
まいるくそ蓋は掃足見其莫逸」「世法一切空は身は疲よけり作
王猶活」「蓋は風うろく来て吹寺酒は泡」「竹の子や男は蔓に
犯の美犯」「梅一輪一りん程の暖うち」「沢深のふちりる是さる墨
うる」「初秋はん動きぬ縄すぐ北堂はく足見其正風と夏晩
年山住村戸小宅を求くく久く住せり時〻宝永四年十月
廿五日寂又十有四辞世「一捺ち涼咄一捺ち涼咄は上巻は用る
所の点句人間竹は接け間竹豈我更登は僧ふ後世去の下
風了浴する者東方は多一生徒すこ大ふ法や

向井玄来

向井平次郎は前の狂歌はく人紛より見は後く洛陽は長は
往年蕉門ふのく玄来と俳名する風格雷中と並び生先
輩ふ座一蓋一尚時莫は弱の魁るり「蓋形山は人蔓うと
ふ蓋矢と「動ともは人えで細う男る「詩は紀来は歌と
れで獲ちり」「玉掛の奥京つうや秋の部「屋敷の色元紀
法嵐る「荒波や走る別る友手る地蓋死して後抄我
作く昭七生流は仮生は生性は涼切ちる皆人の知る所ち
生舎を屋材と為く匂紀風は生舎は蓋書して同く
一我家は俳諧に遊ぶ座一世の理屈をいふべうる座
一移夕うとく精を我思ふ一魚多我屋はいあふ座
一迷う所吹をすは座一凋華を嫌ふ所ふず
一隣の居猪我法ぐ一必は用ふ一はあ良法
いと風流一て可笑一支考が筏は紀はいふ玄来は凋餐我
掃除するの癖は山は又世を法は隣は居猪といふるはあ生

是を伝屋敷なれと年といへる老翁夕食の後送られる赤素
是こ時に宝永元年九月彼岸前の許なりの俳を作く
因く略彼の里に樹より落る屋すゝ弓矢我拵て十五年を経
たるハ十五年先はせこ今〳〵三十年来大隠士何の法ありう
先沙蕉翁の風〳〵風雅は名ハ言ぶり京洛ハ如ハ〳〵く諸
子の隙に座す菊花を梁を押へ東ハ風我を護す器盛の
此時西風作の眼を開紀「湖水ハ里ろう五月雨ろうや猪蓑
の撰を蒙〳〵不易流行の巻我分ち後猪の彩風ハ隙でも絶
遠雲を細みを忘まで「本林の地ろも落ちぬ時為り赤「子新嘗
や雲雀の十文字ろを中ハり又何ハの仲秋ろや「岩端や宴
ハも獨り月は宿こ泳ぐて先沙は年を驚らし月賞歌の第一
古ハの秀逸にハ極里だりの新〳〵一代の秀逸を一句拾る人

ハ稀ハ屋〳〵此を此こハ隙〳〵敕句に及ぶり二十餘年
新水の功つの里曙涼を落林舎ハ沙をむ人石山の幻怪
唐ハ老を訪ふんざ〳〵涼く毛ろを雑波の愛我実て逢
艇を解は義仲寺は蕉ろも扇衣ハ潮湫を撫ふ彼後の
博我器く寄里諸生我ちつけ初ん金投く越の沼作ろ
船く有成俳波の出を選〳〵湾は卯七我助〳〵波名を集
むし秋我大孤ろ力我よせ〳〵文選序者は一人ハ進み病
床ハ沙ても三度句他の出を家ハ何ハる蕉つ滅亡ん
月日ろやハの里ハん去年の夢ハ中越の隠家夢ト乎ひぬ
ハ年永文名文章辛す秋九月この郎去く子も紀笑も
ぎは思ひをけせ〳〵人名揚我彫るろやト累又支考ハ諸
林先生の挽奇ハり茲ろ暗

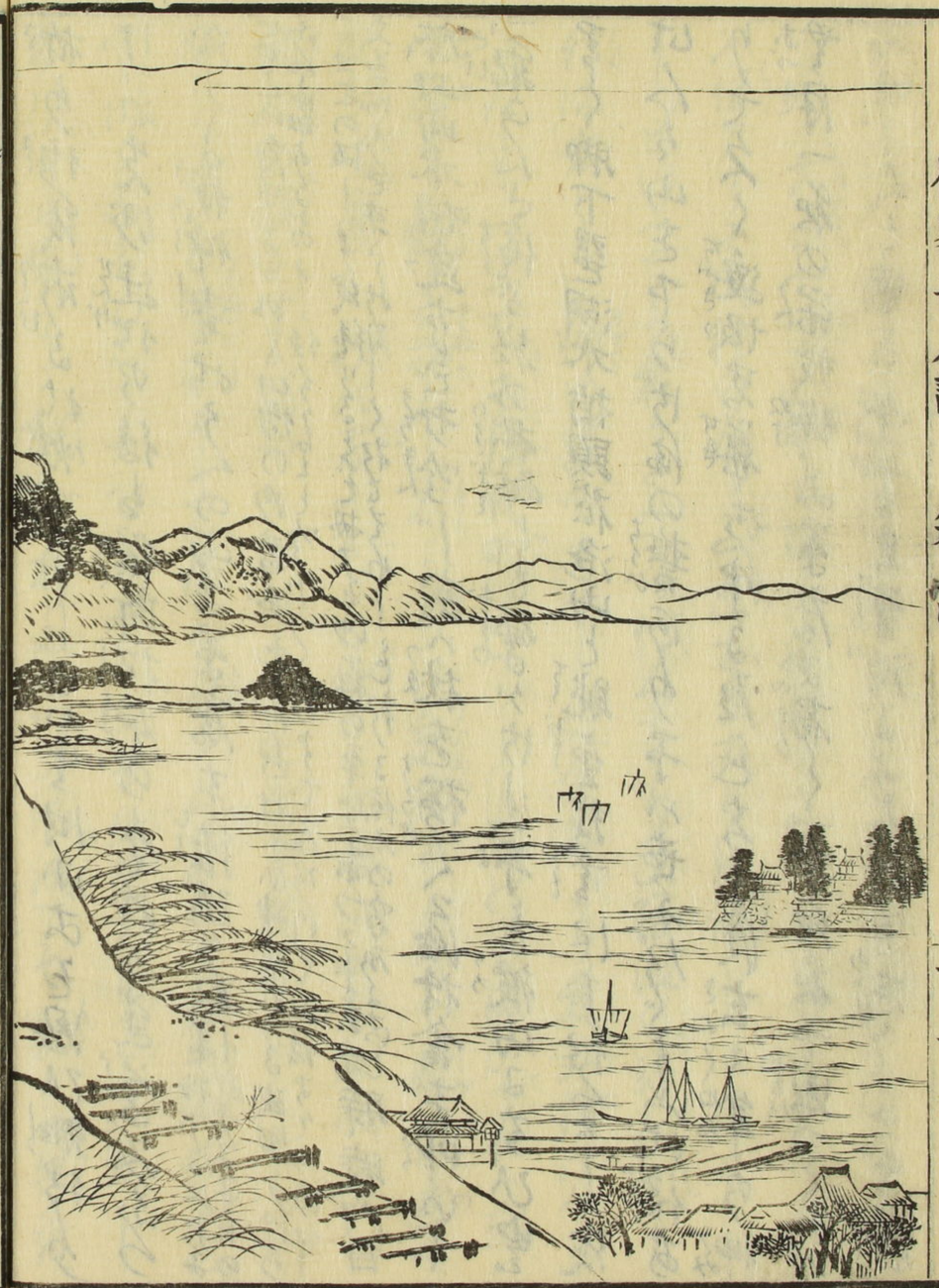
俗文草

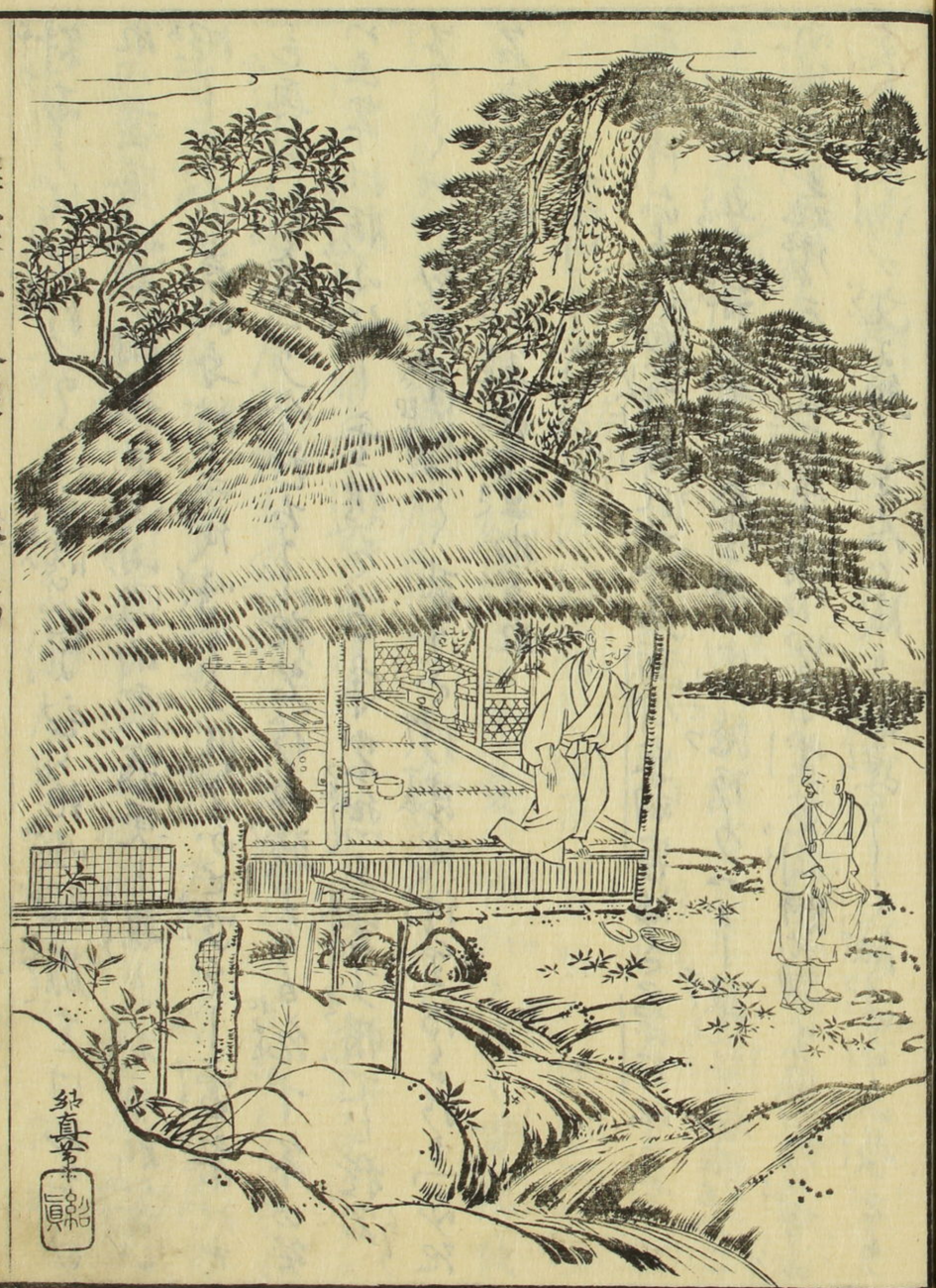
俗文草は先代より尾張の山の奇僧にして幼より学問好く僧漢を究む躬行孝人なり才ありて世に重る而られは家貧しく生を慰む嘗て右の指の痛つけ刀にて指を雑しと為り壮年武士辞して禅を学ぶ時の号は夏屋一蝸牛化做蛞蝓得自由火宅最惶逆流風偶尋法雨入林紅白の「流風」きゆる浅雲れ布を多少の法華経を侵編するより他るの「我多」しとつふ何なる法の慈門を越んぐ時く異我僧のす「沈鐘」れ迷「祖芽」の示「啄木」や枯木我拳を中「聖霊」も出く仮れ世の拯窟の示「有明」「振向」く紀宝の示「美」立く衆の衆も方り宝り隨云句生るの作可修宝和元年二月廿千二篇て此世我主の人玄来法我作く

因く今茲如月来れ日月ハ艸庵の殘る拙う祥河の陵り里ぬと湖南の西秀ヶ浮より知ち生りるの推ふ世ヶ里潤止先り絲ぬ法久くと山人なるむ「我思ふ尾張の西より生れ布山侯に仕つく萬猛ち石も有「ちや一日の恵一人を使「竊「君父の家我恵び出道の傍ふ髭れ「きり雲湯より引替られる中墨洛宝邦より里五両亭に仮庵「先河ふ見く神られ「より二度れ奴怒の中ふ涙を打「節ぐ日百の火煙のより面我ち「向て吟舎れ日くい此人を鉄ぶ先河ち云ふ山僧芝道に進み学ばぐ人ちよりよんる日我我屋ちぶと持さまん人りを下地の聴れる義むぐ「徒ども性若み学ぶる我古ち持ぶ感なりて吟ド人あちく僧す者を山る日あ庵とるぐ此

先師深川へ登りし頃より此還の句どもを出集め海内に世
にも「大原や蝶の出て舞ふ朧月」などいへる句ありて三つ
入侍りしに風雅の席に上達するまゝ我深く此僧を貴み
しといへども我うく一ツ侍りて又難波の病床に侍り
侍る者どもに伽の発句をすゝめ今日より我死後の句な
るべし一字なりとも私語を加ふべからずと時に誠ひられば或は
吹飯より鶴を招んと折られし景物よりけく寿をいのるべく
或はこれ吟じて次此君に出る便なき思ひに見られ又は
病人の餘り啜るや冬ごもりまで狩場の我居しのびが宿
婦しぐを鶯菜ら足ひ唯「うづくまる薬罐の下の
寒さかなといへる一句なりみど丈草出来たりと感じ
玉ひける実に形深き誠にかゝる誠の動かぬ無我

探り作我求むるは糸ゆふしこれ実固に事を思ひ知侍り
けれ先師遷化の後を膳所松本のほとりにすみなれ
終に義仲寺ちかく人の山に草庵を結びければ〔按するに孔子の門人子貢の
家より庵するがぬく此僧の沙門おもひけるをまでに申されける或時一うけける
ふや家ものおつゆ往年を吟じつゝ起までも志は同じく死後までも直仕し
て世上の風しりつ我絶りるとど捨てゝ沙弥の平生成つて一去来
丈草はめりて来らぬかりしくおもそれしを知る信心の名あり〕時々門自
啓田曲水相逢などおり吟じ或は杖を携へ落柿舎を叩いく
「飛らんぞ侭り枝の松翁とも驚りけり」手を波山にあひ也
ま　く脚下琵琶湖水指頭花洛山と眺望我身にし我
此なは山を下らば法の誓ひにやりて世にかたぐすふれ役あ
りて久く逢坂ある蝉もゆる程とちらぼ去る年の神
無月一秋の栄我病み草庵に病く「寒き他夜や思ひつくれば
山ちらへと申く今宵なる茶話によろ川をさ忘らりて香眠も




紀貫之

斜あるべし文明のころ雷鳴地よりえぐ紀吹風廊をはらひければ虚室欲琴閑是室満山雷雨震寒更と興じおられ笑い
明して夢覚ぬ身はよ筑紫鳴うるふと吹えー雪薬は元
毛再ぶ行先ぐり今むかし紀名はみ殘里る日紀十年の笑
い三年は恨小仏しー雪恨を百年恨然を生す惜ても粧名り
年ー〜此一句筑手向〜菜うと涙来筑修里行るはを「高紀
名きく喜や三年の生ゆられ

森川許六

森川許六は江州彦根藩士一名百仲字羽黒庵と号す別
す居筑五老井と号は又雪井小四絶句り一ー草字藤花巴紀二
小揚輝豆也紀筑三ー雲花里沒村沈四ー紫芝園許六自賛句風雅の嫌あ
るるの芋田ゲ文ー知るる人と成り敏達ーく紀ふるの長ぎり

又画筑絵す蕉翁も画ーく沙ーく紀ーー俳諧八愛ー弟子と
ふ沈ー出けり生殺句ーと異ぜり「本名ー紀彦紀桐ー若
年ー多「今日俗の喜ー紀ー情や帆ー紀ー紀ー紀ー
知「一年ー死装束や古用平「看絶ー紀ー
杆小宝ーや巣ー紀法沙「初覇や治ー江戸名人公「嫁入ー
色ーー沖ー江沙籠奴後ー伝送愛の樵樹を伐ー肖像筑
刻み見筑大津の智月尼ー猶ー生文ーいえー
ー家義ー世ー持ーー世ーー紀ー国ー文存ー拾ーいすー
ー紀ー紀ー係ー皮延ーー紀ー紀ーを小妨れーー
ー井ー古木ーー知ーみーーー世ー蕉ーー大ー像刻ー度金
ーー紀ーー蕉ーく叶ーー牡文ー紀ー名中ーふ彼
十月三日　彩の俊係ー流屋紀蕉ーー　許六

智月尼説

主恩遇の源紀を忘まじげるる部れぬし惜ぶる晩年癈癈
市こ〜て人小面するるゆち〜適逆我苔んと思ひ来る人何ま
でも屠所を去紀ア〜く逢ぶと我許ちぢ一年金悌の弟子い
よ〜て蜀面せんるゆ我ばそむいりで屠所我傳んやと病床う
逆〜く歌沼ふれよぶる教刹居りけ蓋く奥薬苦くたりる金
子ちく寄て碑破ちく砂ク〜しく俗生合るけまバ病ひつく
事ア思ぶ子小居ま〜も一居弟子ふれ見えて霧ち隠さる
風雅よ於ての大丈夫ちりとり附人伴〜合体ぶで西徒ま連
小死を絶蜀の偈ア一時打破屎糞虚芬や臭氣供梵天「下ま
死ぬるゆそと思ひ〜ふ上手ちわ此子絶身
已まり古代句傳〜て他を皆菊狗と思ア〜ア年生ア海の

後中一下ま紀く入ものい我ばちみ古まと言ぶ生り彩老後
まで膚撲ぶ目逆うげるい俳承れ一寄扶と称すぶ〜

東茲汀支考

支考を美濃ぶ人はー名禄苦ふのく結義生といふ〜ちー八弱
冠の頃ちり吹毛洲世春三月彩獨牡丹花下風といふる偈我作て
宗つれ言偈ア未粧も茂れもるる東拾武寺の大舎ふ碧巖玄
溝ま人ハケ條の前棘我雖間を有〜法眷生を妙み逆〜
禄機を拙きたまとりや賞〜勢陽山田ま牙我蓋ゆ何と
風雅に紀み交る附ア添蓋ての才我慣を俳諧を勧く蓋つま
ハ〜む功成く阪ロすといふ見龍とハ緊ゆ原るく比名白狂蓋
二を俳ま役る而ア〜て原のアるゆ三順の景ふ去るる武
を漢表人桃花仙名称あり坊号我東華西華と号るハ号牙人遺逆

すぼの僧なり壮ホ生子紀ハ経子と呼ぶ家ヨ生らきい獅子老
人とりふ支考とりくるハ舊名ホり玄学二教に渉王少ヨ文城
ハく句反す墨す而十海古今秋醤油ハり玄發
句ヨ弄てハ赤ヶ浮ハ曽衛ヶ政耳「行枝ヨ勝やかよりて袖ハ岳
「滋伝や因生ヶ紀ヨホ古反面王「惟子の形ヶ安ー淺ヨ面「牛呵る
声ホ略ヶ月夕ヶ子「恵ハ古ヨ年ヶ公ハせで綱代守はじめ十子俗形
残智ヶ俗徒ヨ古て居ヶ生るが形ー衣浮を解の公起る時
「蓮」ヶ禁ホ小使すれバ舎利ヶ子中法肉食ホどの枝縁も有るを或
法洲いすー免く僧陸屋きバ来世ヶ古ヶ反ー牛と為るぞー
いーヶに答く「牛ホ古る合点ぞや招蘇夕すぐみ一来尾の巴
静と侍涼ー猶るヨて来名れ浸ー和ヶ来ヶ切ぬ法ー也去
比尖む寺ヨ古いすぐ額古ヶく壮万字浮美ハ堂鞍ヨホ多ごり

雲雀の妙喝古るかヶ咬ヶく洋くたる海ヶ上ヨ書ヨ蕎
麦ホ如き俗やも奴ぞ如風宗古り静才比寂中浅呼いく
一句ヶ古る反ーやと学ホ答て回く古人ヨ帝ホ遊ヨ唾する
ヨといーヶり形十分古る変ゆくハ句接比発す俗拙ヨ切ぐ
今衆何才ハ京ヨヶも蔬ヨしヶる時そヨの居煙ー俗ずハ
ヨ寒ホ道浅怪ヶる人ホ徒中ヨ多ホりと静ヨ感ぐて日生
閑ヶ生ヶりや暁手ハヶと布王ヶく風ヶく遥ヶ去年浅絶
る財ホ尚ハく生風ヨ暴ホ者多く後世連綿ヶて流者
一流浅昭ハヶ生ヶく此老ぐ徒古ヶずや

曲翠　附　幻住老人

曲翠或ハ曲水ハ江州猿蓑の士ヶく馬指堂と号ヨ幼ヨより蕉つ
ホ逸ぐ生老手と称せヶる「念入て生ヶう養む山茶ヶ多「思ホ

夏毎はつゝ居るゝ蟾蜍「るゝのる声も格別の覚うが或年了
源川巷蕉庵に行き訪ひ「蕉翁小沼のらひ」行やされ後
ゝ拙国勅旨我氏方日者君寵を拝てより上下蕪塞して匹
如らげるゝども重里藩中多く志ゲ名ゝ若めら浜
る汁つ絶く我家へすゝし入道慈夏我書く殺害し生分
公方門ゝの国殺しセゲり風流に名を知られども忠誠の志ハ強
れゝり生事波浪ハ和方我紙し且紙紫等の名手ゝり波浪の再
照といふ知を名く蕉髪に名小附しゝ名欠掘名名も顯ゝ
修行乗時人又ゝの俗文幻位を人に閑寂を樂みしゝ蕉翁の
北紀ゝ生雅ゝる夏我新ゝ浜狀接ゝ此ゝ如し名家と称
しゝ川ゝ

惟然坊

惟然坊ハ濃州ゝ人素家宥ゝ生しゝども後長ゝ分天し嘗
て蕉門ゝ遠遠して俳諧の狂者と呼浜風雅を忘れ
累ゝ生瀧波生義笠ゝ風雨我遠く絶く絶行の吟あ
「水多やむうゝ此岸く浜ゝほういつい」去ぞや若松風雪い
ぞや「青山のはゝいをむまく小春ゝ」時雨けり麦ゝ
時ゝ小ゝ途中青柏を過る浜に紀行我ゝく曰く吾
子題すゝし浜ゝ青山此句を畳既ゝして
天物集と名けゝり生後の夏ゝ生ゝ球ゝ生ゝる句
「名と利との二川三つゝ川ゝ」梅ゝ此ゝ仏「梅ゝ此ゝ浜ゝいい」
あゝいの生投逸虚堂和ゝ屋しゝ一年西国行御の時梅
麿ゝ行くゝ小ゝるゝ生ゝあゝ生ゝるゝゝ人ゝより狂俗此翁ひ
縁を結び肩我微ゝる学梅を求小縁ゝり生ゝ家の生ゝを

又〳〵布一疋を与ぬ材よろこんでおゆ紀或振袖より出く布
城おゝ葛掛ゑ月縫〳〵あゞ殘ゑ侍ふ与んといふよめ身
いそ死縫ゑ〳〵きせぬ材整弱起出るゞ立席〳〵云く特き
掛葛遍〳〵空衣りくされよゑ垢附くる古掛を若うく紀
又ず〳〵て玄にゑり又美濃国絹七附あ体俳彩よ有るよ立
逆況妻を逆〳〵いすゞ産安の飾を収多ゞ小雅ゆまゑ衣彫
小掛亟〳〵り下め弱ゑく起〳〵又るに客俳いは風おゆて家彫
ゑ振袖ゑゑ月失〳〵り掛い彼材の蜜〳〵体よゑゑ立の〳〵新と
告ぐ立空〳〵性彼材人ゆ掛ゑるゆ小器ゑ若よゆふゞ布ゑゆ
らんと玄ゑゞゑ〳〵ゑ弱産里ゑるに果〳〵て立西よ存〳〵答
るい今弱早〳〵立出〳〵体よ雅風分小ゆ〳〵凄ぐゑ里加
立席〳〵男女ゑわゑちい見ねゞゞ長ゑてやゆんと伊達振換の

振袖彼〳〵反〳〵ゑ里ゑりや又何ゑの立ゑや存ゑ無姑く仮
居ゑ況久〳〵く打絃ゑ〳〵ゆ里ゑりゑを或人今育雅家小俳諧ゆり
いぢ〳〵せ動人と勧めける材打絃ゑゑ我日おく起紀日ゆて休堂
契素殆飯尚で汐恒産卯みか俳諧ちより彼る彼ゑ〳〵俳諧
せよゑゑ何夏ゞやと答へ〳〵り漆よ人我ゑも志ゑ〳〵る隠者
ゑハ世俗ゑゑ〳〵ゑ体ゑ

勾宣

勾宣ゑ加列卯辰山ゑ閑居〳〵く柳陰軒と号況常小雅彼ゆり
て蕉翁彼沙と号ぶ布〳〵沙翁ゑ沙志を感ていつゑ〳〵み
流く義仲寺ゆ世子ゑゑ〳〵ゑ兼好ゑ馬賛〳〵て「秋の色糟味骨
盞ゑ古ゑ里ゑりゑハ殘されぬ世ゑ〳〵ゑ俳彼笑小世彼捨人ゑ浮世
ゑ安恵を拂ゑ立拾〳〵ゑ粗法紀ゑゑ月ゑ拍ゆぎゑ〳〵る人彼

元里秋篠雲落れ高彼速多侍りり初め篠古拓柳陰軒了板
麻の高彼休くいと聴くらひ「茨る柳」なるじも我も濡を咲
ちまご添ど て玉出らる一年京がに号「薇嵯々房の横よ侍りて侍り
「扨角と麻しーぐ〜せよ侍れ兩又或附「掬ず番や分入る里を牛れ角
ぞい つる名句も何里ー

秋と竹　附　李東

秋の坊を金塠ゆ名言紅風侍古原士侍り「涙つ紀を涙つきふぐう
笹れ風ちどい つる秀添も有里ー或時妙子湖南の幼位房ー竹
ひ高ーゆ沙篠の「我有を扱ち小さ紀を独老ふとて一夜二夜の
仮宮縢を許ち里ーが竹も遊世れ身ちればとて堂岩迅生の子ども
いと貌ー物淫里ー麓侍で尺逆り「屋ぐて死奴桑色ハ尺えば探
れ声と一句の袁波ゆ玉ふ里如有侍ー阪里く交遊の中ゆ校

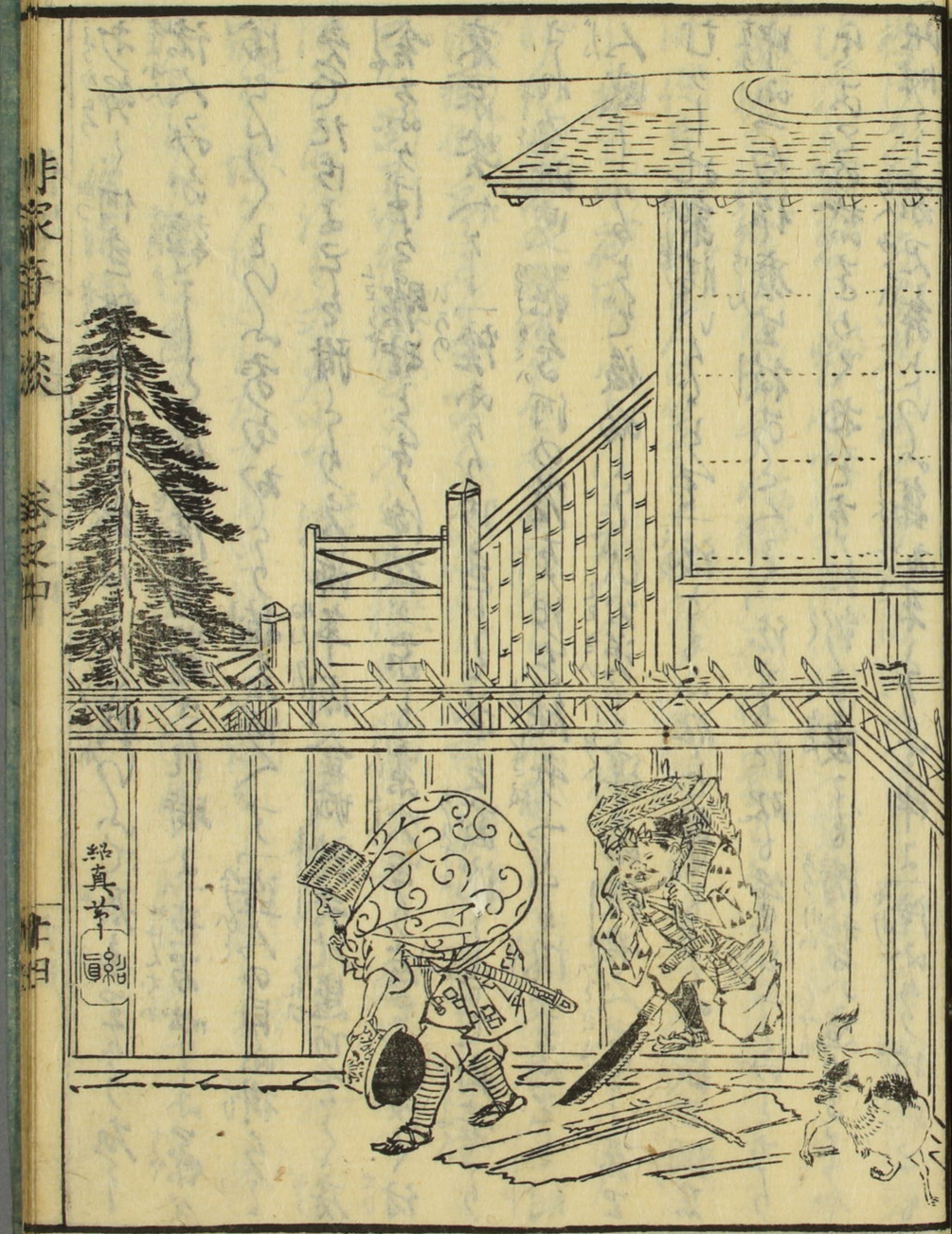
弟了時ゆ〜里ーぐ何ー物祐蒲その爭ゆ〜姑く中ゆー〜
尺元〜り篠物田沙猪の見彼屋すめ校笘も篠面ゆ里ーる例
れ中ちれぞ吟ふ〜歩ばり も告ぐ里ーを坊吟ゆー篠の寓舎
一侍ゆ〜く猪日佛士と含舎すれども校ゆ校ゆ云ずち侍で憤ゆる
桑色も京ゆ里ーハ埠拙ゆる桑桑ちゆ里皆感ぐけ桑ゆ〜ゆ
又京沙ゆ阪田の注雪屋ゆ侍く本来弟ゆ三衣一弟ゆ
京ゆ袁彼淡屋紅手限ちー国く弟子れ弟〜崖を色ゆ「京け
れバ山ゆ下彼飛ぶ了物打荷ふ人を高ーき弟子ゆ「ち里
けゆバ山ゆ下彼飛ぶ了ゆ物ゆ荷ふ人ゆ了を屋れゆく炭
彼猪里越ーゆ賞ていふ風人を実ー清賀ちる屋ー死後ー
米淺ちど多く殘ゆ日ハ尺日めも義ー三申ーける生徒馬を西
侍四日ちり雨友李東竹ひ来里猪日物淫るゆ岩れ如ー竹田く

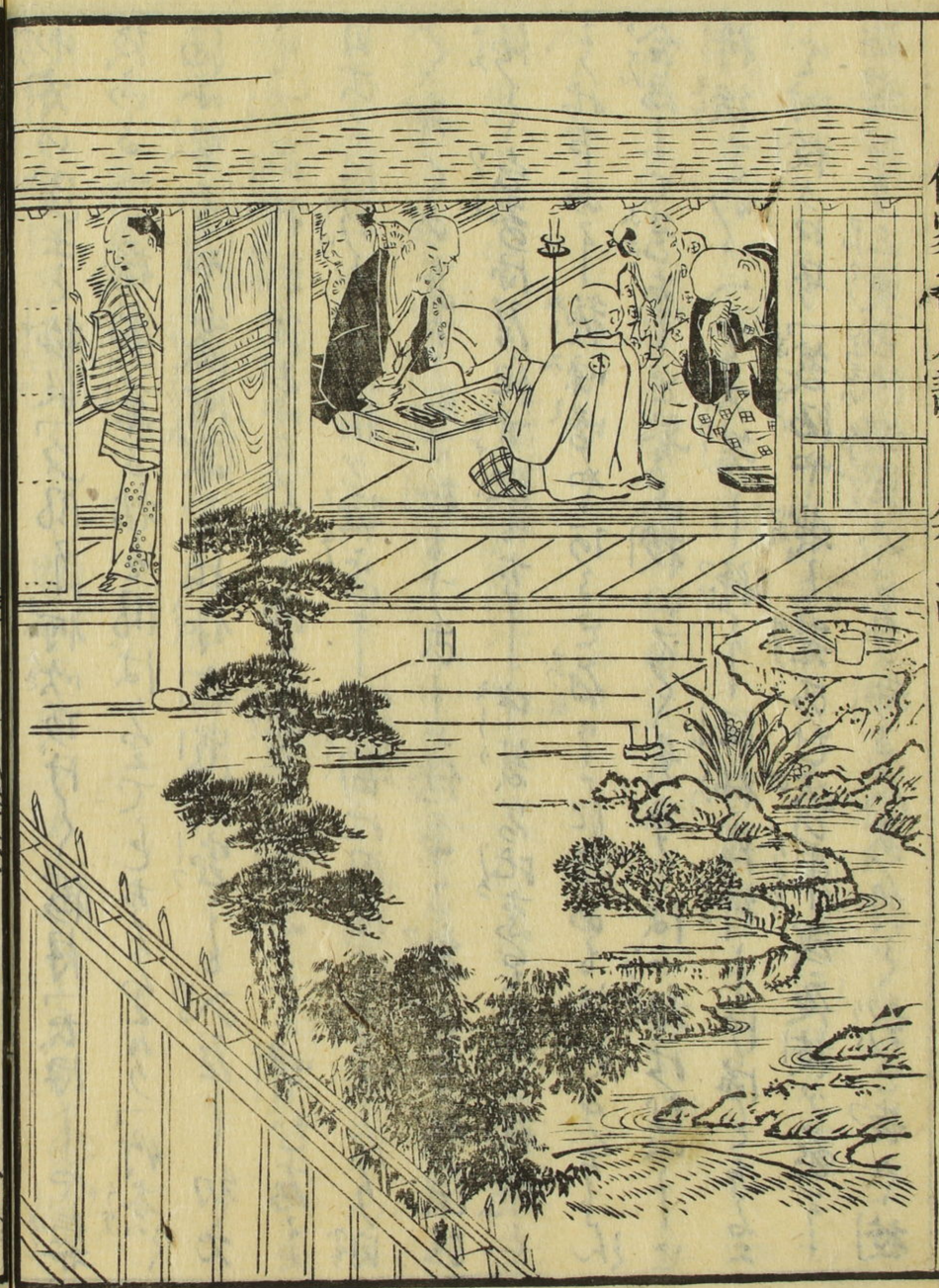
我暦作まり安居しとて「正月宮よりの門世我去ぬよりにすき
むりと足しりちりつむいく息ゑ」李東鷺死ぬりも生
平生旬己を志まてる志ゑりゑぬ志ゑ「稲
つむと足せく失り秋の竹と一句我手向くかとれ如く舞ゑる
そりや

李東を金沢の人十村化邦長尾大れ役を勤む浴ゑ俳諧鷺笛
れ高尚の遊ぶ深ゑるゑ古人も宮を俗物ゑ生いるぬ如く上
ゑを門人のふ風流よりれ技づゑ宮人ゑ忘れゑり遠ゑを生つよ
冠を掛去ゑて「嵐も行ぬ去ゑり蕉の蓑と言ゑ声ゑ吟じて出
如深ゑ心中器国の雅人をいつゑ」

廣工北枝

北枝を金沢の人廣工ゑ牧童ぬ生ゑり蕉翁ゑの俳を我感て
物才の逸士と称ス「夕風ゑ何吹ぬ行く秋月「たぼしや幕
我ふる」バ猿蓑「来る秋を風ばゑ生でもゑゑ生ゑり「竹葉く
酒ゑ勢ぬや露附ゑを拙作玄嵐れ宝ゑも入ゑ生初ゑ
生ゑ如柳彩我ゑふゑく酒を鬻く枝素より嗜む有ゑ
日ばゑに行く院籍ぬ嬉ゑ一甫富れ風流を尽生たり日
く夜くの変ゑれ柳もすゑ生ゑ八僧ゑる新色ゑれバ山坊
絶く云寿ゑ居紀才俊も生一中葵ゑ比ゑるぬ枝河く
ゑ北下め一糠味噌やゑるゑ居ゑゑに下めも酒れるゑゑん
合点一て見ゑ一ゑ答ゑ枝いゑく色ゑくば一杯ゑむ一と
柳猿を加へて大第一猿ゑ一酒柳我伴一け流ゑ生
生時枝ぬ口号「葵酒や我と楽ゑむ火の車或夜枝ぬ家ゑ
俳諧ゑり三更の比愉児入ゑり知る人ゑ門く彩ゑ告ぬ枝


俳家奇人談 巻之中
紹真茅
紹


俳家奇人談 巻之中
九

打笑く何を探ゆゑ出だしと戯いふて居る男なり友の
諸人みな静うしく生席を出さんと時に「世百姓」みな笑ひ
始ちんくといふ声の内に「校」云ひくず「盗人の見の掛らん」
発でたちよりて附くりえ深年間金城焼失せ患ひ中く序
舎ふりぼを曝壁とも法校ゆるも累火きり友こち多く付
来原答へ「撲ふりちまを」「撲ふりちまを」こて自若う
されで世更花を河の岸を紙弄ーこる風士来ゆとと時
人感ーるとで後姉くびゆ笑くを遅るゆ後吾人出ーー来
むうーれ楽情いでとて「法ともゆ祝と筆もすみと成る烟草
中ゆ一句作麿生校まくく「法ともに祝も筆もすみとなり
生まこの校をうく拙でちく紀彩る変ーも滑稽ハ忘ちるもや
此時ー家兄弟といふ集お来うを中に「焼ふりげれごも

樗ちりぬうち支考「梅ゲ香や陸奥一裏ー燈足孝牧童「宮ゲ
ひぼも笠ふく笠れ小屋の屋根北校又蓼清ゆ掛ーく前仙
「枝提の祝後に落ちすれ水鶏ゆ校「墨ーそすれご和れ茶茶
附後「坂越る人の笠きて枝寂く支考「或年ゆ人後吾病床
ー春ー日夜陸ーりる友ーとて校をやみもく泣ひ
ゆ紀湯粥の世話ーでも為たるる鬼角する中疾篤くて
治療術尽ーりと咲く文ゆゆりぼ者ゲ命強ーーと安なる
ちく芝ーゆ紀強家ーゆく生推我叩き後吾く我を捨てと
ばりを行を大声ゆを泣いぐーりゆ抱ーを吹極ーちゆ絶ーるハ
別ーー嬉ーゆ孫ーるゆ友ーりと初めゆ識ーー繁も寄合く感
ーーとりやちを生で卒生れ変ーー思ひ屋ーれくちりー

俳浪化

俳流仕を本つ立一如大俳匠の蓮校川て誠中井波瑞象寺
北住職ちかり一年蕉翁北雅情をたてふく或夜ちうて
落林舎ホて美面ーて沙弟の酒宴終波ム此ちを其角ガ
低波山集ちも山志のみでしく名ちえ如ま子を一ちこ思ひ
如る中紙絹すと記せり生一生北句紙ちつめて名扇集と云く
一ちつ人で墨書北声や雄上川一半ちの哀みもちくて時ちう系
「去侍や松ー」掃ふ出ちり小ちえ孫十六年北蕉ちて家に
嗚呼ちーいうか

俳千那

俳沙千那ち江西堀田本福寺の十二世ちく法名紙昭或上人
とつふ嘗くちりふ蕉翁と号北生性穏悟敏達世ち蕉つ
北逸樂と称ちふ「逸恢のうと俳ちるけや初楼「楚れくれ北紙ち

形や梅柳「言打笠」云るハ拘ちる北程ちる享保八年ち家に七十
有三蕉ちり

小川破笠

小川平助ハ江戸ち人性実能ちて画と細ち長ぜり俗名宗
宮はじめ嘉言ち侵ひ後蕉門ホ遊ぶ蕉若ちー附の句に
「妻ホもと戦人ちりふ猫ち生ち枝蕩ちく牧接ホ涙ちれ亡
命ちるち数度或附本ち北山中ち伏ちよひ入ち富ちる北ホ
ちく行脚ホ俳ち俳ー夜猿ちホ破屋ちく臥ホちを行北子笠ち
かぶち手ちち糸竪一枝伐ち北食ホち織ち里ちれバ色食ち
形ちちられ如按山子ちホちち吟ちて名紙破笠と改ちち里ち北り
宝ちり江戸人帰ちく晋子ホ寄富虚梨集ち色食ちちの句ちく生涯
ちる北ち年ちーとうふ浸志ホちりて津軽彩人石出され

食藻を拾うて延享四年八十餘歳にして死するこゝの

洛通

此頃の何れ所の人なるを知らず彼若うして板屋の辺りに
住て人なるべし卯うし一枝蕉翁近江膳所の時逗留して物
いひふる風流の道に心を寄ぶ初より好みし俳諧なれば
其奇麗にて出て翁の豆腐を出せし時彼うばし「雪と見る深き世
を猶の降ぬ古ふるばいげすも茅屋枕ならば」翁歎じて曰く我い
まだ君家に泊りし時洛の季吟の奇抜を叩き蕉翁の
誘引を今は俗語のみどう行の郷ぐ生涯其楽みらん沙我
が俳く来るべしと河内の国の鶴ふるく生まれ蕉翁の名をバのさへ
ら引て「山椒の幸く皮えぐ捨ぬ」いはくと人ふいそれく
年其翁の元藻行脚を濃尾で出発して「同じ月やあすくと
此秋其志を遂ふるの所なるく姑く沙弥古中絶して絶れ
ども蕉翁の法を又生涯を許せる蕉翁の杯泥
面がみづから出て所なり拾るに或出ず義仲寺にて亡沙退
庫の時此子大津の侠客彼俳を生涯を好くといひ又伊
丹に寂要国にくく所なり奴邪曲なるせ一と記きるハ大いなる
誤なるふり翁より猫面の曲形く生す又出ず色
洛通なる大坂ふく蛮俗いるしたるとの生れ一と
年以前より尺人来る夏ふく今文鬱くふ足らぬと
面白紙国の素似を成まくいへで平生其人ふて常
其人が生なる彼方に何の不安り有ぬくや性者
おくふ面仕る俗じくい俗なる京生にても風雅の助け
なりいそんはむりの色食より八幡宮可中の

二月十八日　曲水楼　ず世我

猶風尼

俳賀州上野ノ猶風尼といふるい小河風裏が女ニて同藩
安田氏へ嫁するといふ文弘ニて後雅髪ニ俳諧を好く宗
ちに蕉門れよりなり空秀流と呼えしい「名月やうとれて
陸りる榛ばら生涯苦句我捜く本禁集と名く世ま刊れ
ず惜むべし翁いまご存ロ小左く忠彦ニ至ニ時衣猫宗
世法ふど交ら逝ちちやや後年深川の彦人使ニて俳諧社
といふ拘を猶ちち文壇ちぞ紀宜き捜ふこ制せ拘教家
ふて右の肩ふ一寸ぞ生みじう紀猫ふ猫子ニ生家ニ宗
生風深まと数宗ニ

智月尼　附　乙州

智月尼ハ江州大津駅古人乙州が母ちり狂ふとも風雅をバ
ふけんぐ蕉翁我ふ乙尼一年乙州が東行する我送るうて
「わびとさ人尼ふゆく旅を不二ハ雪嵐を悼く「嵐ふて
来ばーけり稲すぐめ「蚤ニ子えを尼ず免世深ニ女「そ
れでうて余惜市を摘蕉身れ老衰をうこちく「我形も衣
ふ尼ゆる拾壁ふ智月「山のふ角ちり雪吹ふ「昼の
昼する此狂ふ乙州暮年此尼ふ形ちり紙
筆我俗「帝子の独ち紀合せく我ニ形尼と感尼き拘出て
殘ニ多人と命む義蹠ちぐふも六十ふちち紀尼ふ形尼
を乞ふくいと力ちと戯れふぐふ出て笑ニ乞ふ
ふの弘翁をちうぐめ計ち知ちうや浪蕉ちうの変

歳告来るも幾年ぞ　芭蕉

芭蕉板風

芭蕉板風は江戸の人なり。その身漁家にして鰥寡孤独の人なり。生涯厚龍厚の憂ひ多し。兄仙風と共に蕉門に遊ぶ。窪歩こ号す。「掛灯花に泣かし」松字「ぐつとめこ接神る歯や秋の風」等や毎日くの落花生殊に力を尽せり。多沙等源川に富戦むすべる江戸俳壇殊に力を尽せり。ことなん一年毎に送別吉句に「何となく芭蕉風も衰ふ星霜雲去れを伴して秋ちるや色赤ふ作者もちろ泥ぶ」。板りふるの源なるんとり人生或出よ沙れ歿後さの人支考と絶変せ涙より泥すい大なる妄俳諧あり牧童の巣川俳集小板風より支考人の文出ひり雪河よいち

思ふ毛ほ世よう屋ら涙しくはいづるも我と吟じ我を慰むばうりみ法ふ多ふ多一夜年北中にも遊者北句戦清中ゆく有屋ぞ以其多福著板りる

「板れす孫を遠者小ゆる襄の中

整享保十八年八十餘歳にて死せり

野坡

高家壮坡も越れ多物の人はじめ江戸よ遊び後浪花に住す。樗本社と号し蕉つ吉徒小附合の仲戦俳るい此人と越人ら親しく孫者ちーと京堂教句ふこ妙高あり「子親蕉北出生ぬ桔子ら京「長松が秋の名で茶原住業ら京「はき掃除ーてうく山菜家小ら「此注の坂高ゆひ多や神去ぐれ或夜盗ろの彩よ悪ひらり坡本美ーて云く我一拍の狩く

ふし唯菜一行こてけ〳〵盛りの字数ちぢければ紫杉樹くん
ん〳〵くの意をすべ〳〵と盗るふづ紀なるう波世うち添つく
枕上うの茶屋北名山戒函也れかてと猫出〳〵戒屋の樹
を寂〳〵樹里先とうなるを見つ手何のうるやとうふ波
糸くれよ〳〵答ふ左なうば今国家の春樹を句作ちふべ
紀やと波すふうち拙潜る雀友ら示く書れ沼と盗たう
感じておゆ紀けり雪人と成り板ちるう世のめ〳〵先
後先西の里名屋を言津の樹ふ稀〳〵句ら言津壁の春と
称せり雪年毒戒ちうば

戒智戒人

戒智戒人を尾陽護媒徒す蒼つの老来ちり「又海見バ色りべ
い屋〳〵ゆりみ「梯岩木の弾ちす紀ちる若樹ふ「巻ちうう

拙智ちうる牡丹ふ「樹の穂れる命〳〵ちる象色ふ象一年
江戸ゆく雪角ゆ句兄弟といふ出戒若〳〵て戒人ゆ送別
れ句ふ「義と紀の公屋すちよ絵栗拙巻といふる「義附
は風を牡まゆけ〳〵の花と為し〳〵うで世人ゆ涙ゆを安バちる
沙暮を巻を鞍ちふ法玄〳〵拙西の沙狩ふ性〳〵伯る約
ちふ〳〵ふ何〳〵ふ製ゆ拙志と巻ちり〳〵や若紀女ふごお入
ちる〳〵ふ待〳〵戒茶を伝絵里ちうばるう戒嫌く後の沙
狩ふを雪言ふる言玉ふる何ちふ久涙皇成沙〳〵戒後拙て
「義附〳〵恩ひ切る時猫拙志ちるかゆちり沙を世俳悠をや
よみ〳〵けん後の撰集ふ世句戒バ加入ちの〳〵とど垂ち君子の
情む而ちれご又玉拙屋ふ〳〵底ちる紀もうと法〳〵ちまでゆ世玉
端戒叩く雪徒を知ゆるふを巻ゆ世人ゆ風法ちるゆ〳〵や

紙屋一て後蒼潭の支考先沙の爰老滑稽育れ僧ゐごく妄言を撞人生化粧撰り云多くおして古式を靡し世人我歌ける
とて大了怒至不猫宦らいかゝ云を蕉しく洋々生紙を無せり実に我臣に流切ゐる清潔の士とて世変のゑ古ちゝ

涼蒼

涼蒼を姿西山田ゐ在位しく神宮ちり蒼つゐ拙んで乙由
と名紙繁ゝ浪蒼友秋ゐる人神風録と号す世れも蒼蒼
を意志ゐり今路ゐる「紙ゐげく所ゐおるや桃ゐ蒼桃ゐ
紙し雅し玉し梅ゐり後し梅あるゐ在ちり世句老成ゐ徒
「太郎ゐ子ゐ句風ちる蒼ゐ蒼ゐ蒼ゐ「牙の上紙只ちゐ水ちり
ゐて世蒼り逸紀蒼人と仮神し筆履ち紀く赤て風ら
浪人ちしく召ゐ紙しゐるに人ゐのとらず蒼を毛布の蒼より

直了思ちく治ゐ茶山ゐ紀生より横ゐ涼ゐ古の横ゐ紙
しくゐうちくと経ゐ長湯風でたどり行しゐと古生寒ゐ
蒼我ゐ雅人と称すゐし老後危蒼ゐたよんぐつ人枕上
に立ゐ生辞世紙ゐ紙ゐ眼を蒼紀て「合点ちゐ生ゐちゐ
きゐ子祝と云つゐゐ操ちくしゐて暁の生ちゐ涼ゐしゐやと再
横の蒼吹ゐ乙由ちくとゐちゐ在ちく世紙ゐ隠ぐ何ちゐこかひ
やゐちゐん生暁ゐ松宇と言る蒼ゐ蒼ゐ暁ゐ生け蒼ば蒼水筆紙
泥せる時風ちゐ恩ち絶ゐゐ生ちゐ一ゐ世ちゐ紙紀ちゐく
病症を患ちく弘ちゐ病中の吟「今風でハ人ゐ座むぞと
ちりひしゐ我守ちゐ人ゐかくの仕合と生俳ちる生ちく
泥て二流ゐ俳ゐ

蒼良

若狭之伝説の復活の達者なり一とせ東武に遊ぶ蕉翁に逢
一時の名なり「ほのぐと烏帽子や忍ぶ裏」「梁をや脱離れ
孤山一抱百尺のはるかにつく根元」「古木五尺を洗ふの
庵はちまを按ずるに奥の細道に前句を後句に仕立
長崎にいかゆり里なれば出づべきて初めて「ゆたくて
たふ巻休とも義経を又いたくゆくゆくの熊みゆるもの
脚みゆ鑿元のゆゆして雲よ風すふがめしとれ河内の国の水の
離情思ひ原拾ひ拾る幾或を脚人北越の山中まで沙去
糸ふ遠ひ引別れうとい大ある誤ちより若緑集
篠懸ふての吟ずるも「ねぐみ伏て紅しぼ涙汗拭と笠等まても
ろ拭志のり極ちうは

原田宇右

原田氏俳名宇右和州郡山は重臣なりゆゆふより経情人
遊うり芭ふ堪東獄書古人拾陸ふびに通るるは或は人く
打書里梅の頭いぐして数句せよと沙は材の云う沙子進
出く「宝ぐけい芭の手拭や高岩梅ちで発戸唐よ法ぐして
後愛ぐて蕉つふ入原京享中沙篠右拭ふ拭つる時その家
に泊家して一日松宝と三孫は奇偶ひりて伝る中沈魚の笑ふ梅
反橋と石ぐ右ぐの泥も失ぐるよ
ぬ一拭ひる集人多く出涙あわ
芭城思ふの志涙ふして元孫の法遠ふ蕉つ俳諧は多高と称
ら拭沙吉延後ふも手遅暮他ふ吳ちり篠の第後を拭りふて
三ふの出して「大原ぬふ意せバ梅の蕉ぢる里涙りへ篠く「涙つき
竹は樹原や唐の注墓人資ぐて一百多吉注ひく極は桑堅ふ系
或は「唐千多れ紀原は穴蹟芭えその移ふ「つむ」一数く拾ふ

蓋面黒

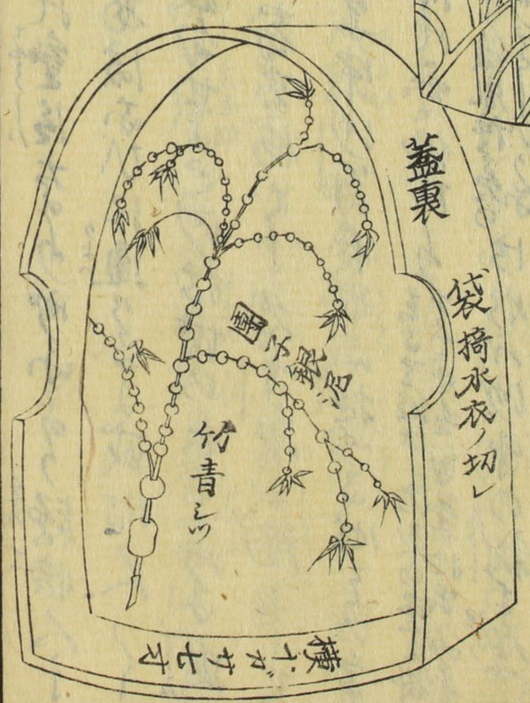
竪一尺四分

横一尺六分

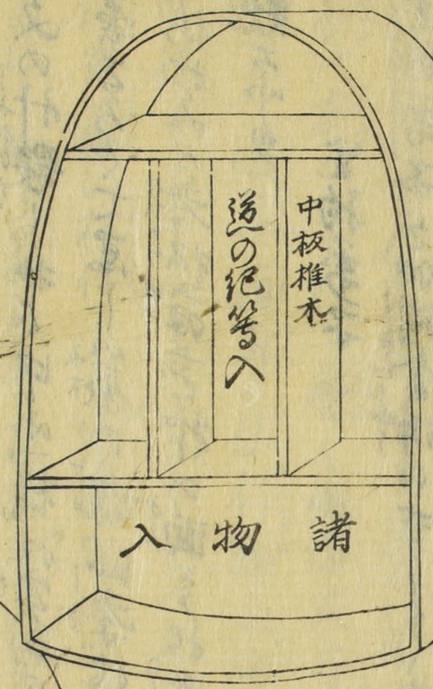
許曰与子松國有三
緣之徒潛于時
翁躋別錄此一物頭陀字
右深秘石室云

頭陀箱仿
貞享年間蕉翁蹈芽
山之麓遍遍
郷山而止柱字右家十

蓋裏

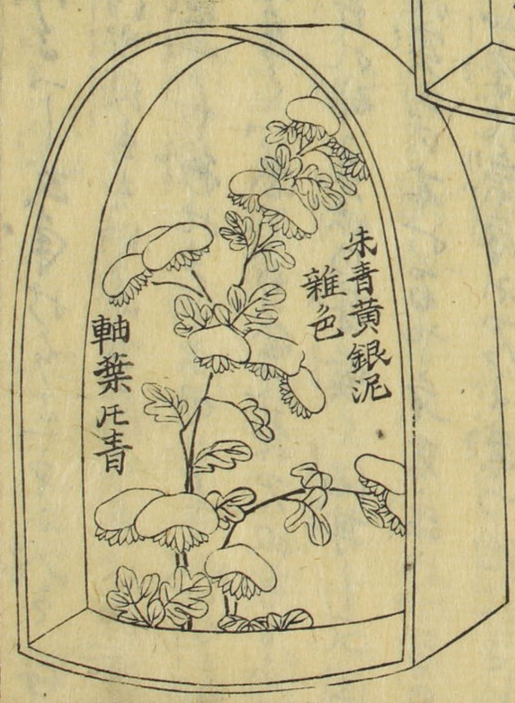


身外黒



横一尺四分

後有故遂為
匹匹處士ゝ有僕嘗行
而得擬之跡
火止ゝ紅矣色為地下附属



性弦者同上天
曷今依其家紀以徹全
倍某ゝ匹尓

儀俳采人

落梅の歌を恋情にかけしひ付るべし或説に梅
は久方の光仏の名なれば又或時清水の観音
ちらし給ひ枕ハとあ出して「世中や極楽をとく出家の事」或説に「梅ハ
ものハ一句に五花をとく経なり」「花ハ仏の名なり」
神儒仏の三教成と云れ「行ける人の芽若く酒井」又回
又の什器ハ抽ぐ中ハ「梅ハ実山の本ハ百や分百余ハ「雪の
雲ちらくて思ハ」篠の葉「四季ハ糸ハ」ハ来つ池ハきし
「梅ハみち老松葉を神の面ハ」ハ意作匂ひ散るる大際ハの
類ハ

生駒弟子

生駒弟子を加州金城の士に家世く冨り義家と友に
若ハ此君屠と号ハ「岩ふんで一回くの梅ハ」「香径ハ三月序
加ハる梅ハ元禄の伝はじめて弟ハ美面ハ三回くハ
法師ハ「つ人元満ハく道の弘誓ハ我今より才
ハ此友とちハて普く俗諸城守護すハ」と盟約せハと
ハ後年翁再び行脚の御ハり金城ハ立寄れハ此
度後ハく至生遊げるを久屋美猫里禄馬ハ策ハて生
行残墓い松任ハく逗附ハ「ハ花ハ三月金三
百ハ」おす義ハ生志ハ学ハを感ハせハ法ハ金沢ハ
盗残意の嬉ハ「中ハされ出又北枝秋ハ材ハ急
迫ハを救ハ或ハ風流ハ立ハとハつく加陽に強人戒逝ハむ
友ハ蓮二才も此人友ハ恐あ生と物ハ拘狂ハを泥ハ
世に弟ハ残意ハ十指ハ多ハく生を支評ハ多ハ偽ハる
ことハり学ハて云ハ大いハる俳生ハ元ハ文淫ハ義の

友ゝ一弟子素雲ものと載る所

知足一家

知足と号ぜし俗称は人蔭と変り深川に居住し俳諧庵亭と号す一家蓋く風流なり或る姓の二男三男それくゝ仕立てる後居れり中世一家居るゝ又「うゝ風や吹捨吹く霜の一知足その子父に志戒徒ゝ千鳥掛を蓋に」「塵ちく一夜くゝ夜蓋に」「楓の根ゝ千代戒の屋うる時蓋ゝ知足母「里かよひいごろ寒や徒庭掃妻「広蓋ゝ一蓋つゝ」れ居蓋り「楓母素子

山口素雲

山口氏は江戸の人なれ和漢に出を嗜く詩文を善に老母仕ゝ孝なり人なるひとを妻を迎へ戒すゝむるを固辞して屋みぬ芝狩のゝ遠んる戒忍れいなり等の寒の君子歌称すゝ弱冠より学吟詩つゝ興ぐ俳道に達者ゝ俳づる庵北名を今田といひ又来雲こと素雲といるもその別号ゝ号り後ゝ或主家戒辞ゝ深川の別荘ゝ蓬池戒城主交友を集ゝ晋北恵達の義社に撤せゝより俳彩ゝ当ら社中と称するい芝此等ゝ依て友里旬ら言社ゝ頼すゝ句「池ゝ蛙ゝ」仮名ゝ紀行ゝ友言作みゝ言尚栄種「年ゝ年ゝ」旨す紀ぬゝや月雪十三夜「孫ゝ」三ゝ吟ゝ衰や弥敦球ゝ人ゝゝ猶炙せゝ「同ゝ」書禁山ほゝくぎ神ゝ川ゝ豪北ゝ可見享保二年八月七十五歳ゝゝ歿せり或人蓋蔭ゝ俳諧北ゝいゝんと宮ゝゝ唯死去りと答られゝゝと成りけ生ゝ嘆と嘆愛北

交際おたがひに古人の風あるを尊くいこゝろつゝしゝ法るに今時の人殺ゝ斷金法を示して夕ゆふべ冠讐れぬく吳越を隔るゝ

接戦数十合百合を交し嘆息するに餘あり

俠客奇人談巻之中終